

第71回“社会を明るくする運動”作文コンテスト
最優秀賞（大分県推進委員会委員長賞）

「あたたかい社会にするために」

九重町立このえ緑陽中学校 1年 岩下真理華

責めは受刑者だけにあるのか。その疑問はずっと、頭から離れないでいた。

私は、奈良少年刑務所の受刑者が情操教育の中で書いた詩についての本『空が青いから白をえらんだのです』を読んだ。

以前は、「非行」と聞くと、怖かったし、あるいは自分には関係ない、自分はそんなことはしないと生きていた。

この本を読むと、受刑者の背景が少

しだけ分かった。親を亡くしたり、虐待を受けたり、親が離婚したり。学校の先生も真剣に受け取ってくれず、逃げ場を失った心は非行に走ってしまう。

仮に手を差し伸べてくれた大人がいなくても、薬物の色に染められてしまう。更生して刑務所を出ても、社会から白い目で見られる。それが社会復帰の妨げとなって、再犯に至るケースもある。日本の受刑者の半分以上は再犯者だそう。

確かに、償えない罪を犯したのは受刑者。許されてはならない。けれど、その受刑者に罪を犯させたのは、周り

の環境や社会なのではないだろうか。

私には、両親がいる。虐待も受けていないし、親の離婚はなさそう。学校の先生もよくわかってくれる。それでも、生きてきた中で「辛い」と感じたことは数えきれないほどある。

受刑者の方がどれほどの苦痛を感じているかは、想像もできない。それをもっと、犯罪の被害者の方やそのご家族の無念と同じように心が痛む。

社会から偏見を受けて、再犯する。この悪循環は、いつになったら断ち切れるのだろうか。

私は、その答えを「社会の目があたたかくなった時」だと思っている。罪を犯した人への偏見や差別がなくなり、そういった方々をあたたかく迎え入れる社会になった時だ。

そうすれば、再犯だけでなく、初犯を犯しそうな人の苦しみを聞いてあげられる人がいるなら、初犯をも未然に防げるのではないか。

偏見を取り除くためには、まず知ることが大事だと思っている。受刑者の方の苦悩を知っている人は、果たしてどれくらいいるのだろうか。

私は、この詩集を読んで初めて知った。本当のことを知りもしないで、勝手に「怖い」と感じたり、「自分には関係ない」と決めつけたりしていたのだ。事実を見つめることなしには、何も始まらないし、一人一人が変わらな

いと社会も動いていかないと思う。私は、自分自身が悩みを抱え込まずに身近な人に相談したり、周りの人と積極的に会話をして、小さな変化にも

気付いて、話を聞いてあげたりできるようにになりたい。

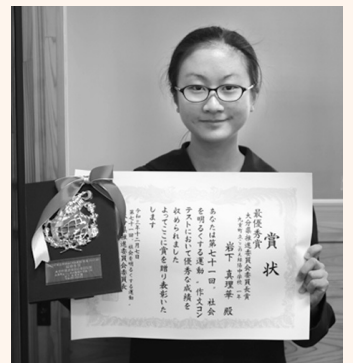
私の学校では、今年から「ピア・サポーター」という取り組みが始まった。これは、悩みや困りのある生徒の話を聞いてあげる力を身に着けて活動する生徒のこと。

夏休み中に、ピア・サポーター養成講座があったけれど、あまり興味がなかったし、忙しかつたので、私は受講しなかった。けれど、この本を読んだので、次期の養成講座には参加して、周りの人の心を軽くしてあげられるようになろうと思う。

非行のない、あたたかい社会にするためには、私たち一人一人にできることがある。

身の回りからあたたかい地域の「輪」を作ることだ。

そして、その輪が広がって一つの大きな輪となり、「社会」と呼ばれるようになれば、それが一人残らず入れてくれるならば、もう二度と犯罪や非行は起こらないに違いない。



岩下真理華さん



“社会を明るくする運動”～犯罪や非行を防止し、立ち直りを支える地域のチカラ～

▶ 地域のチカラが犯罪や非行を防ぐ

テレビや新聞では、毎日のように事件や犯罪のニュースが報道されていますが、安全で安心な暮らしはすべての人の望みです。犯罪や非行をなくすために、取締りを強化して罪を犯した人を処罰することも必要なことです。しかし、反省と償いを経て地域に帰ってきた人を社会で受け入れていくことや、犯罪や非行をする人を生み出さない家庭や地域づくりをすることもまた、とても大切なことです。立ち直りを支える家庭や地域をつくる。そのためには、一部の人たちだけでなく、地域のすべての人たちがそれぞれの立場で関わっていく必要があります。“社会を明るくする運動”では、犯罪や非行のない地域をつくるために、一人ひとりが考え、参加するきっかけをつくることを目指しています。